





# 《全米批評家協会賞》受賞作

## 「アウステルリッツ」

W・G・ゼーバルト作



建築史家アウステルリッツは、帝国主義の遺物である駅舎、裁判所、要塞、病院、監獄の建物に興味をひかれ、ヨーロッパ諸都市を巡っている。そして、彼の話の聞き手であり、本書の語り手である私にむかって、博識を開陳する。それは近代における暴力と権力の歴史とも重なり合っている。歴史との対峙は、まぎれもなく

アウステルリッツ自身の身にも起こっていた。彼は自分でもしかとわからない理由から、どこにいても、だれといても心の安らぎを得られなかった。彼も実は、戦禍により幼くして名前と故郷と言語を喪失した存在なのだ。自らの過去を探る旅を続けるアウステルリッツ。建物や風景を目にした瞬間にフラッシュバックのようによみが

える、封印され、忘却された記憶……それは個人と歴史の深みへと降りていく旅だった……。多くの写真を挿み、小説ともエッセイとも、旅行記とも、回想録ともつかない、独自の世界が創造される。欧米で最高の賞辞を受けた、新世紀の傑作長編  
(鈴木仁子訳 四六判 二九〇頁 本体二〇〇円 7月下旬発売)

# ウェルメイドなミュージカル脚本

## 「シンデレラストーリー」

鴻上尚史[作]

「泣かないで、シンデレラ。かわいそうな女の子を勇気づけ、すてきな王子様との結婚をかなえてあげたのは、歌って踊れる」ネズミのチユウ太郎たちだった！

だれもが知っている名作童話が、とつてもファンキーな物語へと生まれ変わりました。それも、大人も子供も納得し、ハラハラし、ドキドキし、キョソとする「シンデレラ」の物語を指して。

魔法がとけて、馬車も御者もドレスも、元の力ボチャやネズミや貧相な服に戻ったのに、シンデレラのガラスの靴だけがそのままだったのは……なんだろうか？

## 名場面で人気の秀作「一篇」

「双蝶々曲輪日記」本朝廿四孝

【歌舞伎オン・ステージ19】 権藤芳二[編著]



『双蝶々曲輪日記』は竹田出雲他の合作。大坂新町の廓で生まれた二組の恋の運命に角力取り長五郎・長吉の逢引がからむ人情劇。相愛の吾妻に身請け話を強要する西国侍平岡らに散々な目に遭った山崎与五郎は発狂し、一方南「兵衛は悪人を殺した」が許されて、愛

なり、長五郎が落ちていった実母の家には……。義理人情の機微を写し出す「引窓」の場を打つ。『本朝廿四孝』は近松半二作。上杉謙信と武田信玄は諏訪明神の法性の兜をめぐって反目。両家和睦のために足利將軍義晴公の正室が謙信の娘八重垣姫と信玄の子勝頼との縁組を決めたが、義晴は曲

の恩義から平岡らを殺す破目

戦して、將軍三回忌までに犯人を捕まえられぬ時は息子の首を差し出すと誓約する……。中国の廿四孝の説話をとり入れた「笥掘り」、勝頼を慕う八重垣姫の恋心を描く「十種香」、奥庭狐火の場は、名優たちがお家の芸を競い合っている名場面である。(第24回配本 B6判 四四六頁+写真四頁 本体四七〇円 7月下旬発売)

## 白水Uブックス……海外小説の誘惑

### U143 「シカゴ育ち」

スチユアート・ダイバック作

アメリカ中西部の大都市シカゴの愛称はウインディ・シティ。風の街である。風の街にはいろんなものが風に吹かれてやって来て、また風に吹かれて去っていく。東欧系移民の多いこの湖畔の都市は、古さと新しさの入り混じった不思議な雰囲気漂わせている。シカゴに生まれ育った作家ダイバックは、七つの短篇と七つの掌篇からなるこの作品集で、この街の懐かしさをまとい、そこに生きる人々の姿をユーモアと愛惜をこめて描き出す。

### U144 「星を見つけた三匹の猫」

ヨルク・リッター[作]

港町に住む片目の猫フレデリック、しっぽの先がない猫カストロ、肩を痛めた猫リンゴ……三匹それぞれは、ネズミの王マードックとの戦いで負った傷害だった。一方こちらは、謎の塔の中。銀色猫エンリルは雪フロロウのメスランテアの話に耳を傾けている。それは自分の居場所を求めてさまよう「ちび星」の物語だった。やがて三匹の猫は、銀色猫の夢や、自分たちを見守る「星」を見ようとする。それらを通じて、ネズミの王との戦いに勝つ暗示

### U145 「舞姫タイス」

アナートル・フランス作

初代のキリスト教時代のエジプト、神に仕える修道士パフニウスは、世俗にまみれた踊り子タイスに諄々と神の愛の尊さを説く。官能の虜の中にあるこの女こそ救われべきだと、やがて、その澄みきった物静かな哲理にうたれ悔い改めたタイスは、神の花嫁となるべく修道院に入り聖女の域に達する。しかし、皮肉にもパフニウスは、恥辱にまみれていたかつてのタイスの姿を頭の中から消し去ることができない。神への愛と、タイスへの肉体的思いに引き裂かれ、苦

## 稀有の知性の足跡

【書評】 評者＝別役実

### 「ベケット伝」 上巻・下巻



ジェイムズ・ノウルソン「著」高橋康也、井上善幸、岡室美奈子、田尻芳樹、堀真理子、森尚也訳 各A5判  
⑤五八八頁+口絵一六頁  
⑤五三四頁+口絵一六頁  
各本体九八〇〇円

「高橋康也先生は、残念ながら、訳者代表として『あとがき』を書かれた一か月後に逝去されました」と、「訳者あとがき」の最後に共訳者一同の言葉がある。先生の翻訳を通じてはじめて『ゴドー』を待ちながらと出会い、その後もさまざまな機会に先生のお話しをうかがいながら、ベケットを理解させていた。私としては、感慨なしとはし得ない。その意味でも本書は、私にとって特別なものとなったのである。

そしてその通り本書は、驚くほど綿密な考証に基づく、ベケットの生涯の記録であり研究書となっている。おぼろげにベケットの足跡を知っているものにとつても、その掘り起された生活の細部には、目を見張ることになるに違いない。ただそれだけに、特にアイルランドでの子供時代から青年時代にかけて、周辺の人物紹介や出来事の描写が詳細に過ぎ、やや焦点が定まらないくらいがある。ひとつには著者が、ベケットの多くの作品に、その実生活に関わるイメージが散見出来るとし、それをひとつひとつ丁寧に拾い出しているせいもあるであろう。

研究者にとっては貴重な指摘に違いないが、私のように、二十世紀の演劇に衝撃のドラマツルギーをもたらしこの稀有の知性が、どのような文化的な環境から生れたのかをたどるとは、「うねり」のように感じたいと考えているものにとつては、ややまたるこしく感じてしまうのである。もしかしたらこのあたりは、

知性の「うねり」は、なかなか見え難いのであるが、それぞれの死に際して、何とか感じとれるというわけである。

とは言うても、私の最大の関心事であった『ゴドー』を待ちながらという作品が、どのような「うねり」の中から生れたのかということ、それでもなお確かめ難い。上巻の最終章に、『ゴドー』を待ちながらは一九四八年十月と一九四九年一月のあいだに書かれた」とあり、ドイツ・ロマン派絵画美術館にあるフリードリヒの『月を眺める男と女』という作品が着想のもとだった、とされているが、私がこの作品を知らないせいもあり、あの稀有の演劇空間とドラマツルギー誕生の、手がかりとはなり得ないのである。

私の読むがきりにおいて、『ゴドー』を待ちながら」という作品は、突如として誕生し、突如として演劇的成功を納める。ほとんど「あれよあれよ」という感じのだが、もしかしたら事実がその通りだったのかも知れない。下巻は、この『ゴドー』を中心に動く演劇活動を巡って展開され、私の関心が強かつたせいもあり、勢い読みやすくなるのであるが、その華やかな表層的な動きに、ちらちらと見え隠れする「低音部」とでも言つべき、ベケットの沈黙の部分を読み集めてゆくと、その誕生のいきさつはともかく、『ゴドー』を成したベケットの知性の形のようなものが、感じとれないでもない。もしかしたらこの作品は、そのようにしてしか確かめられないものかもしれないのである。

たとえばこの間、『なく』という散文作品が紹介されている。「遠景終わり、なく、地空、まざり、音、一つ、なく、動くもの、皆無、灰色の、顔、二つの、淡い、青、小さい体、心臓は、鼓動し、ひとり、立つ」

これに対して著者は、「この美しくも切り詰められた作品に対して、伝記は無力である」と書いているが、そんなことはない。私はこれを読んではじめて、この伝記に芯が通り、すくと立ち上った気がしたのである。

ともかく、時代におけるベケットの

(筆者＝劇作家)

「オルフェウス教」

人間は神と同一の起源から誕生したのであり、人間の魂にとつて、この世に生まれ変わり続けること(輪廻転生)は、苦しみ以外の何物でもないという考えがある。その苦しみから解放されるための秘儀伝授をしたのが、オルフェウス教だ。その方法は、基本的に、あらゆる殺生と肉食を断つことである。また、ソプラノを食べることも禁じられていたというのだが……。

「百年戦争」

「百年戦争」という表現は、意外にも、比較的最近になって歴史家が使いはじめたものである。まずは、十九世紀初頭のフランスにおいて、学校教育を目的とする著作のなかに取り入れられた(一八三三年刊の『中世年代記図表』)のが初出とされている。ついで、英国においても、歴史書の中で使われるようになり、同世紀後半に慣用となるにいたっている(一八六九年、E・フリーマンは、英国の歴史家たちに、フランスで用いられているのと同じ表現をとるよう勧めている)。

「ヴァイマル共和国」

ヴァイマル共和国では、あらゆる階層、あらゆる立場の男女たちが、勝手気ままな夢を見ることができ、そして、好きなように創造力を発揮することができたという。既存の秩序の重みを考慮しないかわりに、なんらかの「革新性」を標榜する。そこには、自由、社会主義、文化ならびに科学における進歩、人間同士の親和……といったさまざまな概念に関する新しい秩序を確立可能であると信じ込んでいた「異端性」ともいっていいものが存在した。

「あなたにもできる フランス語通訳ガイド2003年版」

通訳試験の案内から、反射神経を鍛える基礎トレーニング、意外に知らない日本文化の知識と表現、新省庁名、世界の国名から衣食住の語彙集まで、もりだくさんのロングセラー最新版。通訳ガイド試験最新問題(平成10年度~平成14年度)と解答付き。日本語・フランス語ともに収録した反復練習用別売テープあり。ラボ教材にも最適です。四六判 258頁 本体2600円 別売カセット(90分2本)本体3800円

「例文活用 ドイツ重要単語4000(改訂新版)」

「単語を覚えたい」、「語彙数を増やしたい」という読者にピッタリの機能的な本です。そのために本書は2部構成。abc順配列の第1部では、使用頻度の高い簡明な例文を必ず付し、学習効率のアップに努めました。第2部では、買い物・スポーツ・経済などの基本語や関連語を場面ごとにまとめて出しましたので、語彙力の確認とアップがはかれます。もちろん2色刷りで、新正書法に完全対応。巻末には重要な不規則変化動詞表を付しました。B小型判 216頁 本体1600円

ベストセラーの入門シリーズ《エキスプレス》にCDが付いた!

CD エクスプレス 古典ギリシア語 荒木英世[著] 179頁 本体2700円
CD エクスプレス ヒンディー語 田中敏雄、町田和彦[著] 168頁 本体2700円
CD エクスプレス ポーランド語 石井哲士朗[著] 140頁 本体2200円
CD エクスプレス エジプト・アラビア語 西尾哲夫、師岡カリーマ・エルサムニー[著] 151頁 本体2700円

本の十字路
あふれる食べ物情報のせい
で食傷気味か不感症に陥っ
てしまい、今さら何かを食
べに遠くへ出かけていく気
にならぬのもしくく当
然とはいえず、知
られざる美味に旅
先で出くわすこと
もまだ少なくはない。
宇能鴻一郎の
『味な旅舌の旅』
(中公文庫)は、
旅の楽しみを回復
するには現地では何
かをせねばならぬと思定
め、「もつぱら、食べる、
という冒険に、焦点をしぼ
ってみた」あっぱれな一冊
大食漢の書いた食へ物記事

編集者
『フィレンツェ・ミステリーガイド』を書いた市口桂子さんと、先日ミラノで会いま
した。ポロニアに住む市口
さんが、不案内な旅行者に快
くつきあってくれたもので、
大船に乗った気持ちです。
昔のミラノの面影を残すナ
ビリオ運河沿いの露天市で、
アフリカの太鼓を値切ったり
しながら、最後はあの「ベッ
ク」地下のワインバーで試飲
することになりました。(W)
初老のソムリエが「喉の奥
で、梨から蜂蜜に味が変わる」
という白ワインをはじめ、数
種類を堪能しているうちに、
彼は「批評家はわれわれの真
意を伝えてくれない。われわ
れは真意を伝えることはをも
たない」と、どの分野にも共
通する因縁を嘆きました。
中央駅でユーロスターに乗
り込む市口さんに、次回作
『ローマ・ミステリーガイド』
の執筆状況を確認しながら
も、ソムリエの嘆きはいつま
でも耳に残りました。(W)

『新版 イタリア基本単語集』
イタリア語使用頻度研究
に基づいた基本語2200を
収めた単語集。全ての見出
し語に簡潔かつ使用頻度の
高い例文をつけ、これを暗
記することによって会話力
が自然につくよう配慮。カ
セットには全例文を収録。
秋山余思編
B小型/242頁/2色刷
本体2000円
別売カセット本体7780円

黒田龍之助の
語学書書評
『新版 イタリア基本単語集』
本書の旧版『例文活用イタリア基本単語集』が出版されたのは一九六九年、今日のようなイタリアブームが起ころるはるか以前である。新版のまえがきによれば、当時はイタリア語の使用頻度に関する科学的な統計がなかったとあって、著者の経験を頼りに語彙を選んだようだ。そういうのも人間味があってよい。私がイタリア語の勉強を始めたときに、並行して基礎単語も覚えようと思ってこれを買った。め、ときどき眺めていた。便利だったが、例文がもう少し整理されていればいいのにはずっと思っていた。それが新版では新しいデータを加えて2200語となった。この半端な数字は何なのかとも思ったが、妙にびびりたりしているとさえ思ってしまった。右が日本語になり、期待通りに例文が見やすくなった。基礎的な語は色刷りで、それも赤色でなく穏やかな紫色というところが目にやさしい。長時間眺むこととなる単語集にとつては大事なことなのだ。
(筆者=明治大学助教授)